

令和2年(第14回)みどりの学術賞選考委員会
委員長コメント

令和2年(第14回)みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者約420名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼しました。

その結果、79名の候補者の推薦が得られ、多様かつ大変幅広い研究分野から、受賞に相応しい研究者のお名前を挙げていただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、造園・景観の分野と植物生理・植物分子生物の分野で活躍されているお二人の方が受賞に相応しいとの結論にいたりしました。

受賞者のお一方は、造園・景観の分野で、みどりによるまちづくりへの多様な主体の参画や多自然居住の推進による地域づくりに関して我が国社会に適合した理論や手法を構築し、阪神淡路大震災の復興過程などにおいてみどりを通じたコミュニティ形成を実践されるなど様々な地域への波及に大きく貢献された、兵庫県立人と自然の博物館館長の中瀬勳博士です。

もうお一方は、植物生理・植物分子生物の分野で、植物の木質形成の中心である維管束形成機構の解明を分子レベルで進められ、道管形成の活性化や制御に関わる因子の発見など木質形成の全容を解明され、植物バイオマスの質的・量的改良と利用に関する研究基盤の構築に大きく貢献された、東京大学理事・副学長の福田裕穂博士です。

受賞者お二人の研究の分野は大きく異なりますが、いずれも学術的な観点から極めて優れた業績であるとともに、人類と「みどり」との関わりについて深く追求され、「みどり」を活かして暮らしていく未来を示された研究として高く評価いたしました。

選考委員会を代表し、両博士の永年に渡るご研鑽に対し、心から敬意を表するとともに、「みどり」に関する学術が新たな知をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待いたします。

令和2年3月16日

みどりの学術賞選考委員会委員長
鈴木和夫